

エレキギター及其オーケストラ

中野譜庫



同志社大
學圖書館

卷 頭 辭

マンドリンギター音楽に関する著書は、之を世界に求むるも殆んど無いと云つてよい。唯僅に英國のフィリップ・ボーン氏が著はした「大家傳」、米國のサミュエル・アデルスタイン氏が著はした「マンドリン記録」、同じく米國のフォレスト・オデル氏が著はした「マンドリンオーケストラ」等が公にされて居るが而もボーン氏のそれを除いては大なる参考資料と成らないのである。

私達は夙に此種の著書刊行を企劃し、昨年春から實地に原稿作成に着手したが、それは震災の爲に全部烏有に歸した。今日茲に讀者諸氏に見ゆるは本年春から新に書き上げたものである。

此著書中に收めたるものは過去十年間に亘つて私達のオルケストラが刊行した月刊雑誌「マンドリンギター研究」(舊名「マンドリンとギター」)に掲げたる記事を抜

増補せるものである。然しながら數年前の原稿は今日の斯界に於ける用をなさざるもの多く、爲に事實上全然新たに筆を起したものが大部分を占めて居るのみならず、「マンドリンギター」の史的考察」は全然新たなる研究によつた。

最初の計劃では一冊に全部を収める筈であつたが、あまりに尨大に過ぎるので之を三冊に分つ事にした。此著は其第一である。第二に出版されるものは「マンドリンギター感想評論集」であり、第三は「マンドリンギター大家傳」である。

音程表は菅原氏が、専門的な精密なものを作成したが、初心の方々にも諒解の出来る様に特に簡単な表を作つて之を掲げた。精密な學理的なものは後日菅原氏の「エストウディアアンテナへの樂器編成學」が單行本として公にされる時に發表する心算である。

原稿は「マンドリニストへの十二講」を除く外全部私一人で書いたのであるが、然しオルケストラの全員はあらゆる方面に亘つて此著の刊行に努力したものである事を附加へて置く。

私達は此著書が、すべてのマンドリンギター研究家から忌憚なき批判を頂く事を望む。而して數年ならずして此一冊が改訂を必要とする程斯界の發達進歩著しい事を祈るものである。

大正十三年十月二十八日、第十六回演奏會當日記之

オルケストラ・シンフォニカ・タケキ

會長 武井守成

目次

◇ギター及マンドリンの樂器としての史的考察	——	武井守成	——
序言。			一頁
前編。ギター及マンドリンの遠き祖たる古代樂器			三
本編。中世より現代			一三
第一節。リュートの發達と凋落			一三
第二節。ギターの獨立(及ギター系樂器)			二五
第三節。テオルポ、マンドウラ等の變遷とマンドリンの完成(及マ ンドリン系樂器と其他すべてのリュート類樂器)			三七
後編。			五九
第一節。樂器系統			五九

第二節。樂器分類

第三節。將來の同類樂器

結。

六一

六五

六七

◇ギター音樂小史

武井守成

第一期。過渡時代

六九

第二期。黃金時代

七四

第三期。近代

八五

◇マンドリン音樂小史

武井守成

序編。過渡期

九七

本編。勃興期

一〇五

◇ギター研究(習得法)

武井守成

序。

一二七

第一章。初學者への豫備智識

一二九

第二章。樂器選擇法

一三六

第三章。教則本

一四七

第四章。樂器及絃線の保護保存(附、絃線の選擇)

一五一

第五章。把持法

一五六

第六章。彈絃法(兩手及兩手指の位置と運用)

一六六

第七章。練習法

一八二

第八章。タッチとトーンとエクスプレッション

二〇五

第九章。ギター奏者の心得

二二三

◇マンドリンオーケストラ研究

武井守成

序。

二二七

第一章。起原、發達及現狀

二二一

第二章。樂器の種類

二三七

第三章。編成法

二八四

第四章。配置法

二九七

第五章。樂曲に就ての研究事項

三〇七

第六章。演奏練習に於ける注意と演奏會に於ける注意

三一三

第七章。主宰者と指揮者

三一八

第八章。マンドリンオーケストラなる名稱に關する研究及合奏團に

對する命名

三三五

結。

三四五

◇マンドリンギター兩系の樂器を含む小合奏

—— 武井守成 ——

一、二部合奏

三四七

二、三部合奏

三五七

三、四部合奏

三六一

四、其他の小合奏

三六四

五、小合奏團組織について

三六六

◇マンドリニストへの十二講

—— 菅原明朗 ——

一、樂器

三七一

二、演奏時の姿勢

三七四

三、練習曲と練習課程

三七六

四、トレモロとスタツカート

三八〇

五、タイム、リズム及ムード

三八二

六、裝飾音

三八八

七、單音進行上に於ける左手

三九一

八、アルペジオと重奏

三九二

九、練習の眞の意味

三九六

十、リリカルなる表現について

三九八

十一、獨奏曲

三九八

十二、合奏の必要

四〇〇

◇コンホルソ略解

——武井守成——

◎作曲方面

四〇三

◎演奏方面

四〇九

◇本邦斯界過去現在

一、本邦にマンドリン、ギターの入りたる時機

四三七

二、搖籃期

四四一

三、勃興期

四四七

附録、オルケストラ・シンフォニカ・タケキ十年回顧

挿繪目次

○現在樂器音程表

○リウート(千六百年)(グライフ作)

○リウート(十七世紀初期)

○リウート(千六百年)(ヴェネレ作)

○テオルポの一種(十九世紀初期)(ハーレー作)

○テオルポの一種(十九世紀初期)(ヴェントウラ作)

○テオルポ(現代作)

○キタローネ(千六百十四年)(ブツケンベルグ作)

○アルチリウート(十七世紀)

○英國風デカコルド(十八世紀)

- アルチリウート(千七百六十二年)(ローシユ作)
- バンドウリナ(十六世紀後半期)
- ナポリ風マンドリン(改善以前)(十八世紀)
- シザー(千五百三十六年)
- シザー(十七世紀末)
- シザー(千七百年)(ストラディヴァリウス作)
- ナポリ風マンドリン(改善以前)(十九世紀中期)
- ギター(十七世紀)
- ギター(十七世紀末期)(ストラディヴァリウス作)
- ギター(十九世紀)
- ギター(十九世紀中期)(ラコート作)
- ギター(現代)(宮本金八作)

○リウートギター(現代)

○番外絃附リウートギター(現代)

以上巻頭

- マンドリン(カラーチエ作)
- マンドラコントラルト(グイッツァーリ販賣)
- マンドラテノーレ(グイナツチア作)
- リウート(カラーチエ作)
- マンドロンチエロ(グイナツチア作)
- マンドローネ(高調)(グイナツチア作)
- ギター(ルードロフ作)
- アルチキタルラ(ポーン作)
- キタローネ(ポーン作)

以上「マンドリンオーケストラ研究」の稿頭

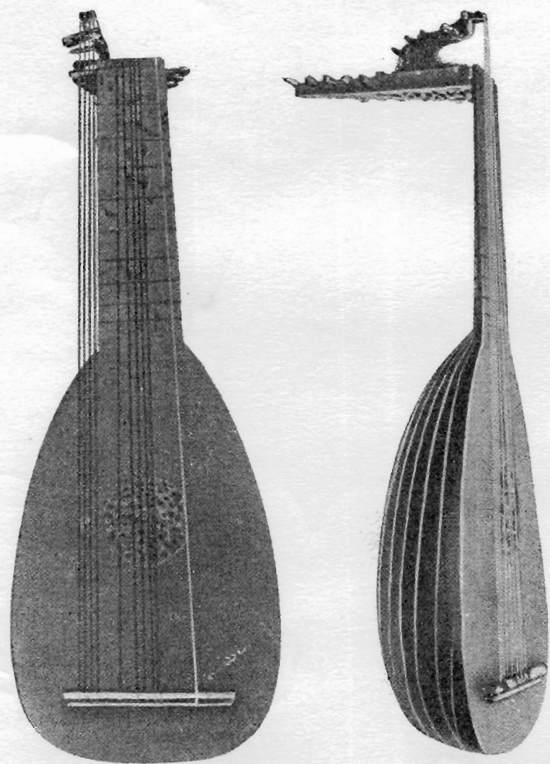
○第一回演奏競演會參加團體全員

○同上優勝團と主催者

以上「本邦斯界過去現在」の稿頭

○「オルケストラ・シンフォニカ・タケキ」第一回乃至第十五回演奏會紀念寫眞

以上「オルケストラ・シンフォニカ・タケキ十年回顧」の稿頭

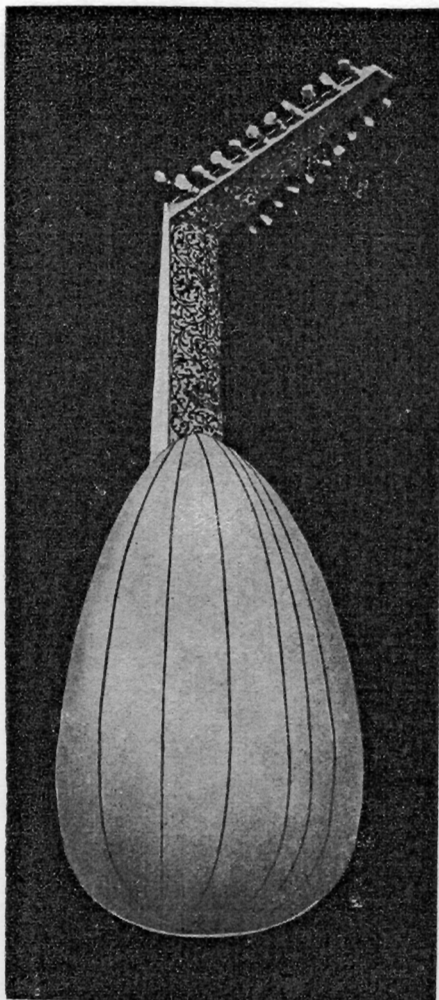


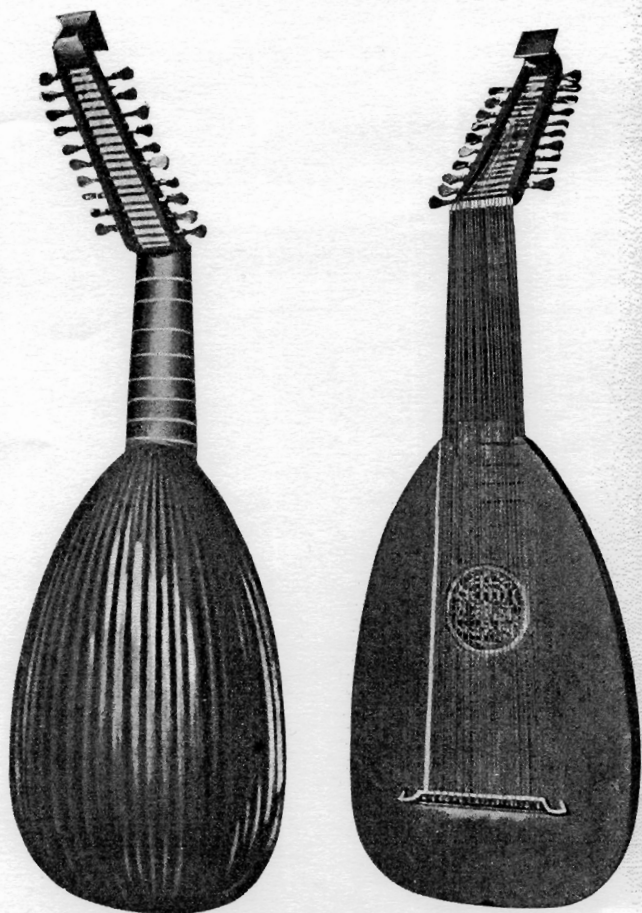
リウート

千六百年。ローレンティウス●グライフなるものの作。

リ
ウ
ー
ト

伊國ヴェネツィアに於て十七世紀の初期に作られたるもの。リウートの全盛期に於ける作品なり。
(英國ダイクトリア・アルバート博物館蔵)



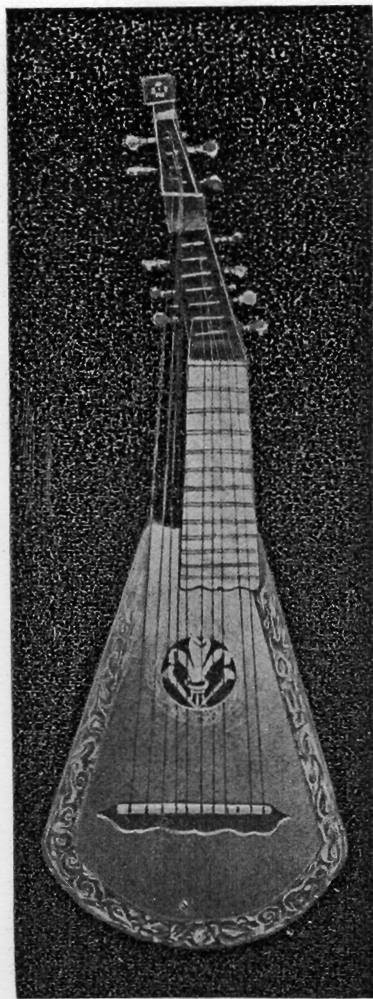


リウート

千六百年伊太利バドヴァのヴェンテリオ・ヴェネレの作。長さ四十二吋、胴體の最大幅十四吋半、厚さ八吋、指板の幅四吋、絃數二十にしてエンツェルによれば高十二絃は二本宛同音とし低八絃は獨立せしめ短二調に合ずと云ふ。

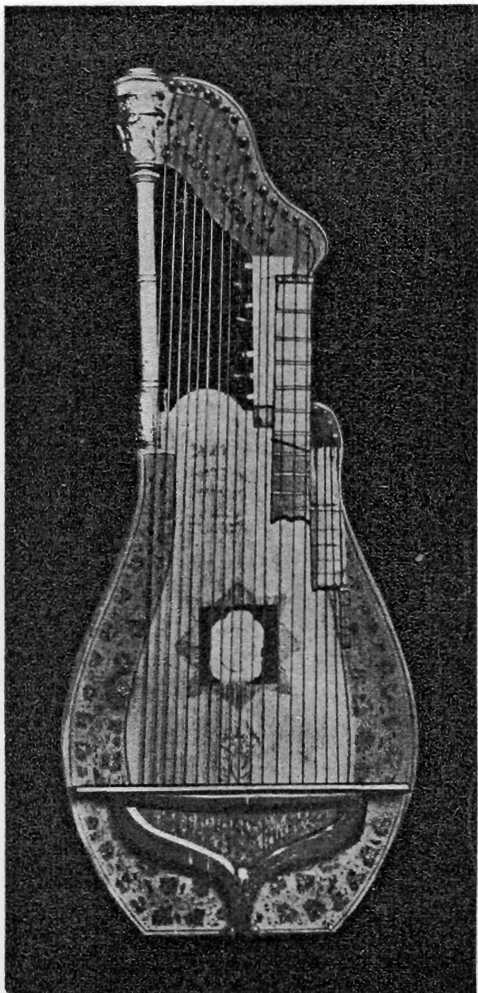
テオルボの一種

英國ハーレーなるものの作。十九世紀の初期と認めらる。特にハーブテオルボと名付く。隨所に直線を用ひたる爲樂器の形狀よりしては甚粗野なる感を與ふ。(英國ヴェイクトリア・アルバート博物館藏)



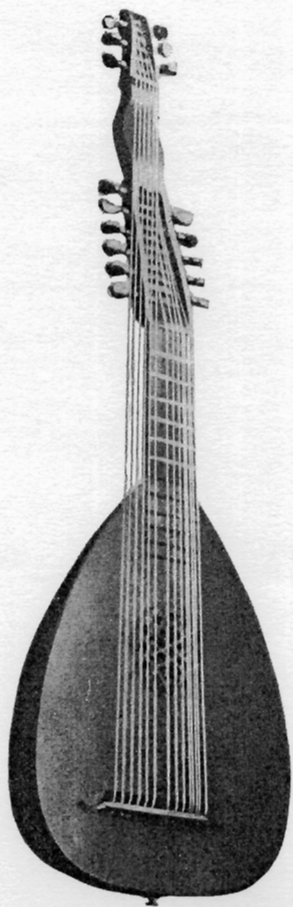
テオルボの一種

英國にありたる伊太利人ヴェントウラなるものによりて作られハープ・ヴェントウラ名附けらる。リ
ット類の樂器にハープの構造をとり入れたる極端なる例。十九世紀初期（英國グイクトリア・アルバ
ート博物館藏）



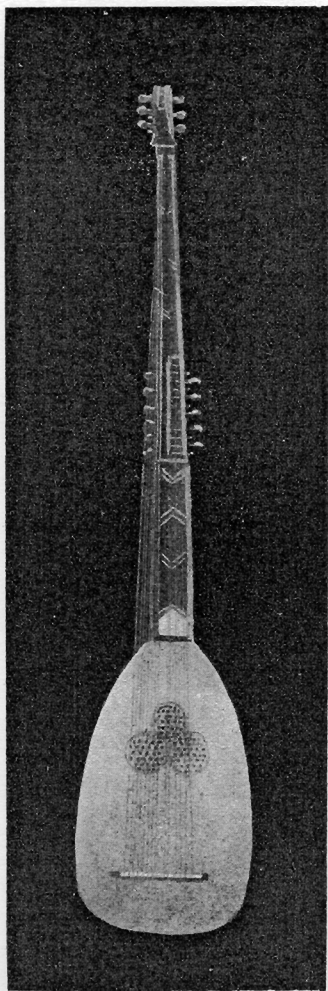
テ
オ
ル
ホ

此テオルホは近代の作にして構造上稍新様式を加味せり。但しテオルホは近時全く使用せられず。單に標本と見るを妥當とす。



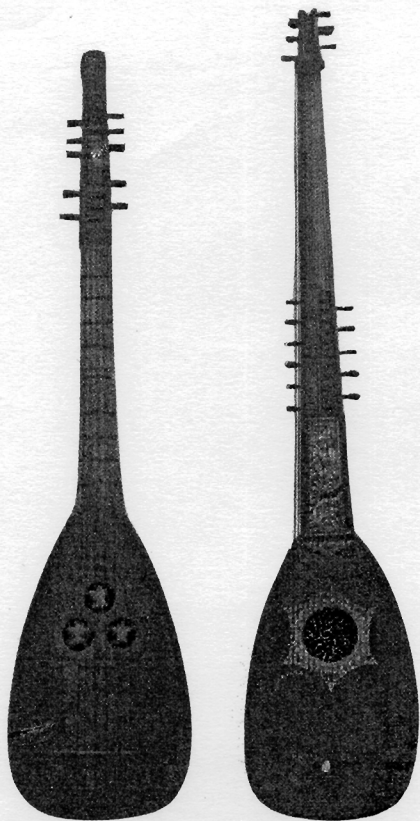
キタローネ

伊國羅馬の有名なるブツケンベルグの作(千六百十四年)
今日のキタローネと直接の關係なし。(英國ヴェイクトリア・アルバート博物館藏)



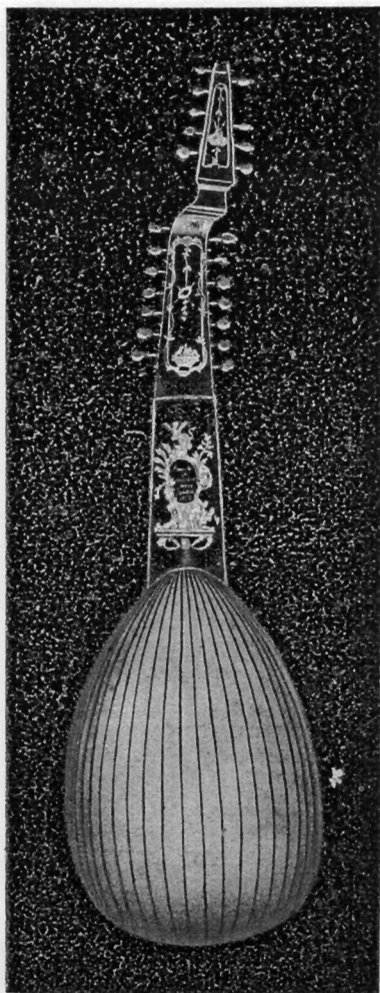
アルチリウート

伊國製。十七世紀。前葉のキタローネと全く同一の形狀構造をする事に注意すべし。即ち此當時兩樂器の名稱混淆して用ひられし例（佛國巴里音樂院博物館藏）



英吉利風デカコルド

英國製。十八世紀。形狀キタローネ、アルチリウート等に酷似すれど番外開放絃を有せず。之によりて此樂器はテオルボ屬（アルチリウート、キタローネ等を含む）の樂器に非ずしてリウート直屬の樂器なることを知るべし。（佛國巴里音樂院博物館藏）



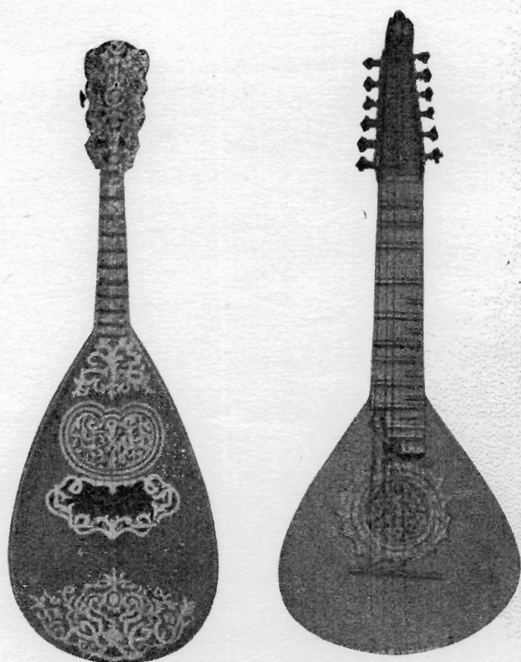
アランチリウート

英國倫敦チャンドス街ロシーユなる者の作。千七百六十二年。(英國ウイグトリア・アルバート博物館蔵)

パンドウリナ

佛國に於ける十六世紀後半期の作。圖は其背面にしてジユノ、ミネルヴァ及ヴェナスを彫刻せり。
〔英國ワイトトリア・アルバート博物館藏〕





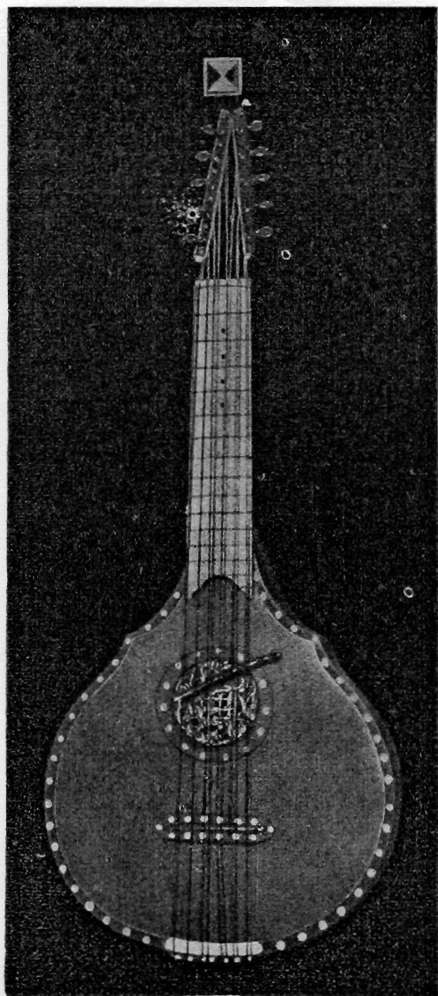
古きナポリ風マンドリン (左)

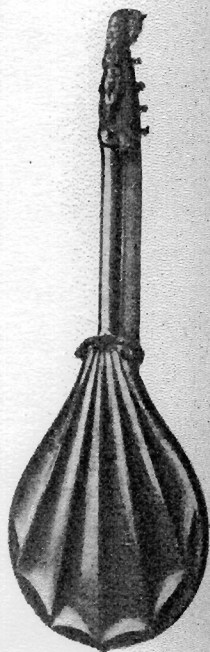
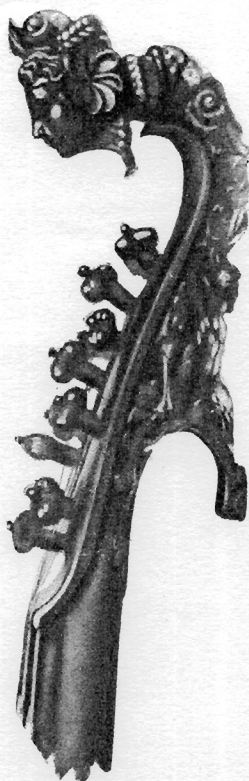
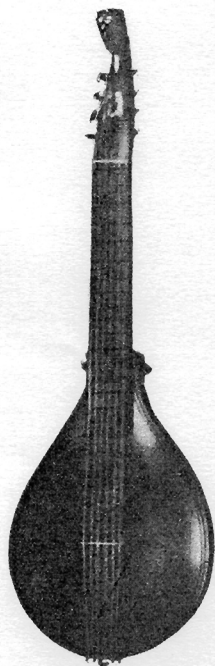
未だ今日の如く改善を施されざる前のもの。フレットは僅に十個を算するに過ぎず。十八世紀の作なり。(佛國巴里音樂院博物館藏)

シザー (右)

伊國製。千五百三十六年の作。次葉のシザーに比する時遙にプリミティヴなる感あり。(佛國巴里音樂院博物館藏)

獨逸製。十七世紀末の作。今日の扁平背マンドリンに如何に酷似せるかを注意すべし。(英國ウイクトリア・アルバート博物館蔵)



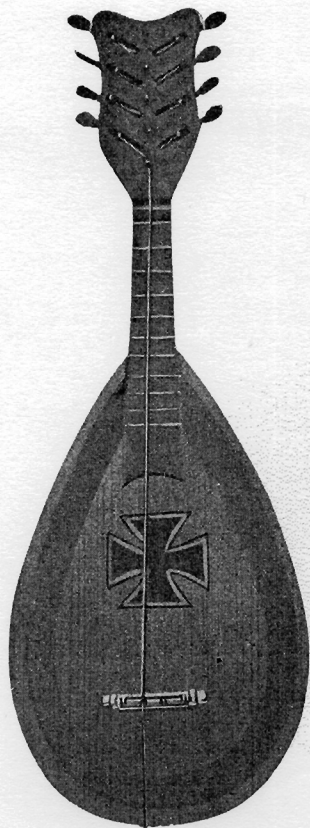


シザー

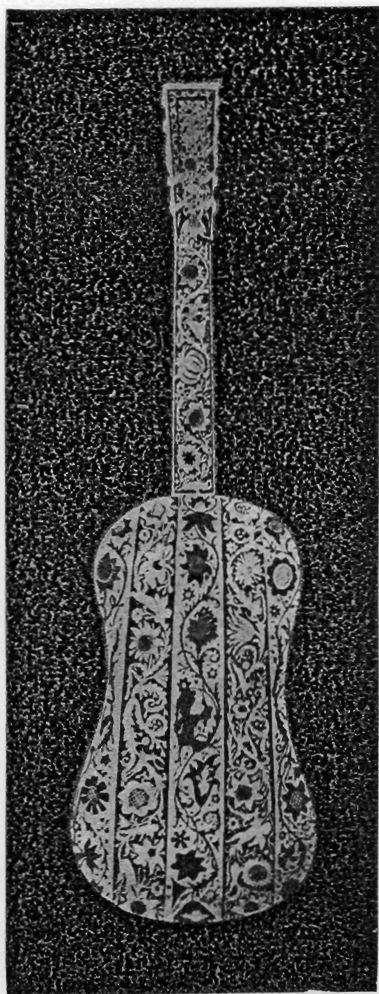
伊、アントニウス・ストラディ
ヴァリウス作。千七百年の作

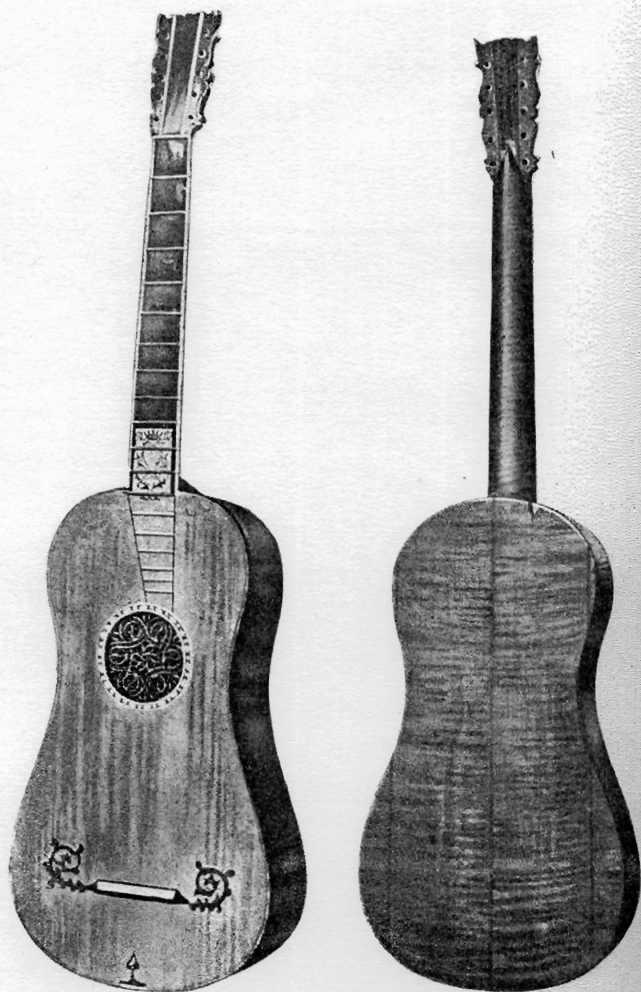
古きナポリ風マンドリン

獨逸人の作りたるもの、十九世紀中期の作と認めらる。特殊の糸巻に注意すべし。(武井守成藏)



十七世紀の作。佛國作品と認めらる。極端に裝飾を施したる例。(英國ワイトリア・アルバート博物
館藏)





ギ タ ー

伊、アントニウス・ストラディヴァリウス作(十七世紀末)

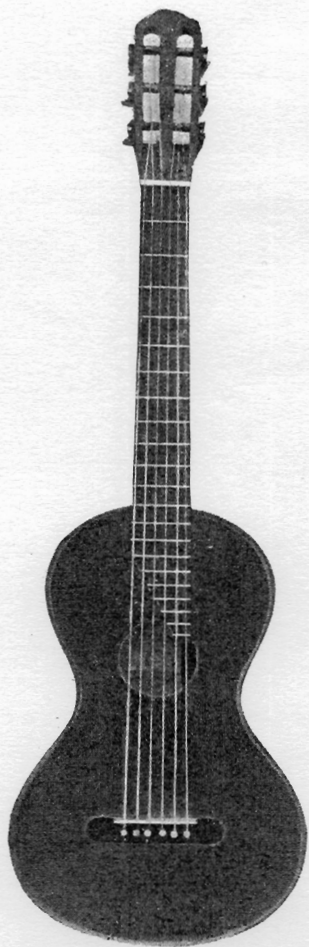
ギ
タ
ー

ナポレオン・コストのもてるもの。表面板に指置板を有するが特徴なり。十九世紀



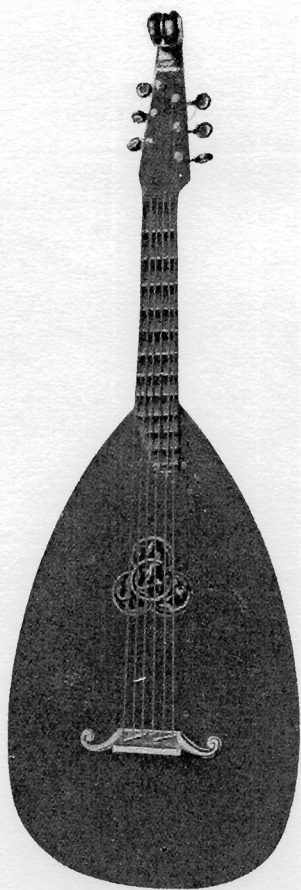
ギ
タ
ー

佛國の名匠コラートの作。今日使用せらるゝ最優れたるもの。十九世紀中期(武井守成藏)



現代の最優れたる製作家の一人なる宮本金八の作(武井守成蔵)





リウートギター

獨逸製。現代

番外絃附リウートギター

獨逸製。ハープギター・ミリウートギターとのコムビネーションなり。現代

